石川県立美術館だより

平成14年12月1日発行　第230号

二十七世 卍山道白頂相　大乘寺蔵

（2ページ「大乘寺の文化財」参照）

目　次

天神画像と文房具、大乘寺の文化財 ……2
藤井外喜雄　ミニアチュールの世界 ……3
常設展示室　主な展示作品 ……3
美術館小史・余話（29）、県美Q＆A、他 ……4
講演会記録（「西田洋一郎　絵画空間」） ……5
図書閲覧室NOW、企画展示室 ……6
美術館の本、貸出中の所蔵品 ……6
企画展TOPIC（「脇田　和」展　その3）……7
十二月の行事案内、各地の展覧会、他 ……7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 …8

URL　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

常設展示室（前田育徳会展示室）

特　集

天神画像と文房具

11月23日（土）～12月23日（月・祝）

今回は、江戸時代に学問の神として広がりを見せた天神信仰の尊像である天神画像と、文人志向の高まりの中で尊重され、収集された文房具を展示します。

天神は菅原道真（菅公）を指し、その信仰は学問や詩文に優れた菅公を崇拝し、画像などを祀り、詩文を詠じたりするものです。平安時代中頃以降、道真を祭神とする天神信仰の発生と広まりにともなって、画像も多く作られるようになります。

前田家では藩祖利家の頃より、天神信仰を有していたと思われ、三代藩主利常は、幕府へ家格、家系を提出した「寛永諸家系図伝」には、菅原道真を祖とするものと主張し、以後歴代の藩主は、今回展示する「胞輪天神画像」をはじめ、積極的に天神関係資料の収集を行うとともに、領内においても天神信仰の振興を図ることになります。

一方、文房具は、文人のたしなみとして、歴代藩主が主に中国招来の品々を収集愛玩したことによります。文房具には四宝と称される筆・墨・紙・硯のほか、筆架、文鎮、硯屏、水滴など多種にわたり収集されています。それらは実用性とともに書斎の愛玩品として鑑賞するために、「白玉雲龍彫紫檀座墨床」や「象牙獅子文鎮」などにみられるように、玉、象牙といった高価な素材に工人たちが精緻をつくしたものも多く、文化大名として高名であった前田家の雅な趣味がうかがえるものです。

金沢市長坂町にある大乗寺は、正応四年（一二九一）、永平寺より徹通義介を招いて開山した曹洞宗寺院です。はじめは野市（現在の石川郡野々市町）にありました。永平寺以外に建てられた最初の曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第二の本寺」とも称されています。二世瑩山紹瑾、三世明峰素哲の時期にその基礎が築かれ、当地の守護である富樫氏のみならず、足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷を安堵されてきました。しかし、十五世紀末、一向一揆により富樫氏が滅亡。その平定にあたった柴田勝家の兵火に遭い、大乗寺は焼失してしまいます。その後、加賀藩二代藩主前田利長の臣下・加藤重廉によって再興。慶長六年（一六〇一）、加賀藩老臣・本多政重により、その屋敷の隣接地である石浦大乗寺坂（現在の金沢市本多町）に移ります。現在の場所に移転したのは、元禄十年（一六九七）です。

現在、本館に一括寄託される大乗寺の文化財は古文書・中近世絵画など三百件以上にのぼります。本展では、重要文化財五件のほか、歴世の頂相など全十五件を紹介します。

重要文化財『佛果碧巌破関撃節』

曹洞宗の奥義を記した宝典。宋の雪竇重顕が禅修業の考案中から百則を選んだものに、圜悟克勤が著語をつけました。中国へ渡った道元が、帰朝する直前にこれを一夜で書写したと伝えられることから、「一夜碧巌集」とも称されます。

重要文化財『羅漢供養講式稿本断簡』

道元作『羅漢供養講式』の自筆本の残簡。後半部分が残されており、愛知県の全久院にある断簡とあわせると、『講式』の全体を知ることができます。随所にわたって道元自筆の訂正が加えられており、本書は草稿本と考えられます。

石川県指定文化財『三世　明峰素哲頂相』

加賀（能登とも）の人。はじめ比叡山で天台宗を学びますが、後に建仁寺で禅を学び、大乗寺で二世瑩山紹瑾に随侍します。能登永光寺の二世の後、大乗寺三世となり、晩年越中に光禅寺を開きました。

◎羅漢供養講式稿本断簡　大乗寺蔵

常設展示室（第2展示室）

特　集

大乗寺の文化財

11月23日（土）～12月23日（月・祝）

常設展示室(第3展示室)

特　集

藤井外喜雄

ミニアチュールの世界

11月23日(土)～12月23日(月・祝)

牧場

藤井外喜雄は明治三十四年に本県寺井町に生まれ、大正七年十七歳で第十二回文展に初入選して、天才少年と華々しく画壇に登場した画家です。

幼い頃に名古屋に移り、その後尾張徳川家の庇護を受け、大正十二年から昭和五年までの七年間、フランスに留学しました。モーリス・ドニの教えるアカデミー・コラロッシーに学び、またソルボンヌ大学の演劇科にも通っています。

藤井の留学期はエコール・ド・パリの華やかなときで、日本人留学生はいくつかのグループに分かれて勢力を競ったりしていたようですが、藤井は常に孤高の存在であったようです。

それは帰国後も同様で、帝展の内幕や、昭和十年からの帝展騒動に嫌気がさし、画壇と交渉を絶ってしまうのでした。以後は個展を中心に作品の発表を続け、平成六年千葉において九十二歳の高齢で亡くなっています。

今回の特集は藤井がフランス留学中に描いた0号大(14×18㎝)の風景画を中心にご覧いただきます。肩肘の張らぬ、親密な世界をお楽しみ下さい。

主な展示作品

自画像Ⅱ
ロダンの家
モンモランシィにて
パリー郊外
ジプシーの女
モンパルナスの部屋

自画像Ⅱ　大正8年

前田育徳会展示室

特集　天神画像と文房具

胞輪天神画像
白玉雲龍彫紫檀座墨床
象牙獅子文鎮

第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室

古九谷

□色絵百花散双鳥図平鉢
□青手樹木図平鉢

特集　大乗寺の文化財

◎佛果碧巌破関撃節　道元
◎羅漢供養講式稿本断簡　道元
□三世　明峰素哲頂相

第3・4展示室(彫塑・造形・油彩画)

彫塑・造形

去りゆく夏　銭亀賢治
白銅浮彫「聖歌の碑」　蓮田修吾郎

特集　藤井外喜雄　ミニアチュールの世界

※上の記事をご覧下さい。

第5展示室(工芸)

燿彩鉢「極光」　三代徳田八十吉
沈金猫文「けはひ」飾筥　前　大峰
友禅訪問着「金鶏」　木村雨山

第6展示室(日本画)

三人の刻　中村　徹
雪雲来る　曲子明良
街　山本知克

◆**観覧料**

個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体(20名以上)	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料

□三世 明峰素哲頂像

沈金猫文「けはひ」飾筥　前　大峰

常設展示室

主な展示作品

11月23日(土)～12月23日(月・祝)

◉＝国宝　◎＝重要文化財
□＝石川県指定文化財

街　山本知克

美術館小史・余話 29

嶋崎　丞（すすむ）　当館館長

全館壁面ケース化へ

旧石川県美術館は、金沢市出身の日本を代表する建築家谷口吉郎さんの設計であった（本紙第二〇四号参照）。石川県から谷口さんへ設計の依頼をした際には、収蔵展示作品のほとんどは古美術を含めた工芸作品であるので、それらを展示するにふさわしい美術館を設計して欲しいということをお願いしてあった。それをお受けになって、谷口さんは展示室の空間に箱型のケースを配置し、原則として壁面造り付けケースを設置しない方式を採用された。

しかし、いざ開館し企画展を開催してみると、屏風や襖絵、それに大型の掛幅や額装の作品は、ほとんどが展示不可能であった。また箱型のケースによって展示室の見通しが悪くなり、看視の目が届きにくい。これらは名刀展事件（本紙第二二九号参照）につながったということもあり、展示室内部を全面造り付けケースにすべきという意見が出されるようになってきた。実は私もそうした意見に賛成した一人でもあった。ところが改造を行う場合には、設計者が他ならぬ谷口吉郎さんであるので、ご本人の了解をとる必要がある。そしてその鈴付け役が私に廻ってきた。今にしてみれば、もっと県組織の上で私のような若僧ではなく、上席の人がその任に当たるべきであったと考えられるが、随分と出過ぎた真似をしたものだと冷や汗をかく次第である。

さて、谷口さんにお会いして、かくかくしかじか理由を申し上げると、「そのようなことを、なかなか話していただけるところは極めて少ない。大変参考になった。どうぞ実行して下さい。改造図面だけは一応見せて下さい。」と快くご承諾していただいた。設計依頼の時には無かったことを申し上げ、いわば設計にケチをつけることでもあったので、内心冷や冷やしていたが、さすが大建築家は心も違うものであるとつくづく思った。

（全館壁面ケース化工事の完成は昭和四十七年三月）

箱形ケースでの展示（昭和39年）

改装後の壁面ケース（昭和47年）

県美 Q&A

Q 床に響く靴音

静かにゆったりと作品鑑賞をしたいのに、床に響く靴音がとても気になることがあります。床は絨毯敷きの方がいいと思うのですが…

A

靴音防止には、確かに絨毯の方が効果があると思いますし、古美術部門の展示室床は開館当初より絨毯敷きです。しかし他の展示室は、一時期に数万人が入室するような大型企画展の会場となることが多いのです。絨毯では逆に外から持ち込まれた砂や小石などが詰まりやすい、ほこりも立ちやすいなどの弊害が予想されました。そこで使用しているのが現在の**ゴムタイル**です。これは他の床材に比べ、靴音が小さくなることから採用したものです。また彫刻等展示作品の安定性も考慮しています。快適な環境で鑑賞できるよう今後とも努力してまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

「利家とまつ」展閉幕

九月十四日より開催してきた「利家とまつ　加賀百万石物語展」は、十月二十七日、四十四日間の会期を終えて盛況のうちに閉幕いたしました。折しも開催中の「加賀百万石博」の人出とも相まって、四六、七六六人の入場者を迎え、県内外からの団体入場は一〇九を数えました。会期中、一万人ごとの入場者には記念品をお渡ししましたが、四人のうち三人までが県外からの入場者であったことから、県外から多くの方をお迎えした事実を裏付ける結果となりました。終盤に入り、大好評のうちに展開した講演会、講座も立ち見の方が出るほどでした。会場のあちこちで、ドラマの場面を回想したり、利家やまつを語ったりする人たちも見受けられ、大河ドラマブームの高まりを感じさせられました。ご来場の皆様と関係各位に心よりの感謝を申し上げます。

入場1万人目の記念品贈呈（9月23日）

講演会記録

作品とあゆみ

講師　西田洋一郎氏（画家）

今回の展覧会では、若い頃からの作品を年代を追って並べましたが、これは僕にとって初めてのことで、順に眺めていくと、自然と自分の仕事の流れが分かって、再確認したという思いがあります。そこで、この場では年代を追って、絵に携わるようになった経緯を話してみたいと思います。

小中学校時代は、授業などで日本や西洋の絵を見せられますが、ピカソやセザンヌ、ルノアール等には興味はなく、ダリやマグリットといったシュールレアリスムに対して興味を持ち、飽かずに眺めていました。

その後、京都で浪人中の二十歳位の頃に、京都市美術館で円山応挙と蘆雪（ろせつ）の展覧会を見て、蘆雪の「山姥」という水墨画に非常なショックを受けました。表情もそうですし、扇のタッチがすごい勢いで、この作品になにかを感じて、一年くらい経って絵の世界に入るように努力を始めたんです。それから神戸外国語大学に入学して、あちこちのデッサン教室通いを始めました。

展示室では「鳩の陣」から作品が並んでいます。これは二十六、七歳の頃の作品で、ここから本格的な制作が始まるという、僕にとって記念的な作品です。その前は油絵で人物を描いていたのですが、自分の世界を見つけ出そうとして、町にある風景を写真に撮って、社会性のあるものをモチーフに描いたのです。車の解体屋の情景を描いた「ジャンク（JUNKS）」などもこの方向の作品ですが、色がモノクロで発展しそうもないので二年ほどでやめました。

その後にプリズムを通して見た町の風景を描きました。道端で売っていた雑貨の中から一眼レフのプリズムを手にして覗いたときに、作品に使えるのではと考えたのです。「プリズム分光景」はそうした作品で、シェル美術賞展の大賞をもらいました。

初めは社会的にアピールできるものをと考えて描いていたのですが、プリズムそのものに自分の内面を託して、なにか世界ができそうな感じがして、「プリズム分光画」を数年間描き続けました。

僕はエアブラシという技法で描いているのですが、そのきっかけはドイツのヴンダーリッヒの作品でした。でも、感情を直接出す表現主義的な方向は続けられませんでした。激情を潜め、知性と向き合うという方向を見いだしたのです。ゴッホやゴーギャンのように、彼らの手が創り出す個性はとても大事ですが、芸術はそれだけではないと思うのです。エアブラシはスプレーで描きますから、手の動きの個性は薄れます。そのバランスが自分に合っていたのです。

その頃、数年間ドイツに留学することを決めていました。ドイツを選んだ理由は、他の国と比べて得ることのできた情報が一番しっかりしていたことと、当時見たドイツ映画のシュールな世界に惹かれたことによります。哲学的で、理解不能なところに惹きつけられました。

片道切符でドイツへ行き、まず語学学校へ二ヶ月間缶詰になって勉強しました。それからカッセル芸術大学の聴講生になって必死で受験勉強をして、半年少し過ぎてから、この大学の試験に通りました。その時は十三人が受験して、受かったのは僕だけでした。

カルチャーショックは当然あります。僕は日本人だ、ということをドイツに渡った瞬間に思い知らされました。人の主体性、自立性が違います。日本人は優しい環境の中にいますが、彼らは自主独立の世界です。子供からして四、五歳で大人と対等に理屈っぽく筋を通して語ります。でも、逆に困ったところも出てきます、調和性が乏しいのです。

それと日本では、芸術家は作品に対して理屈っぽくしゃべらない。でも向こうではそれではだめです。ちゃんとした考えを持って、言葉で説明できなければ、芸術家として期待されない。個展を開くといろんな人が話しかけてきます。自分なりの考え方、好みをもって厳しい質問を浴びせかけてくるわけです。それに対してちゃんと答えなければならない。

その頃のドイツの作家は、アンテスやフライナー、バゼリッツ、ボイス、キーファーなどで、僕の傾向に似てる作家はあまりいません。新表現派とでもいうべきで、皆おどろおどろしい。そういう中に僕はプリズムを持っていったのです。まったく違った傾向の僕の作品が受け入れられて、まがりなりにもドイツで芸術家としてやっていました。ある意味貴重なものとして気に入っいってもらったのではと思います。

僕のテーマは空間です。ドイツへ行ってからそれを認識しました。西洋の考えでは空間は物質なんです。でも、日本人は違う、宇宙的な無、定まりのないもの、色即是空と感じます。空間について考えることで、自分の作品に対して納得した部分があります。そして、空間をテーマにモチーフを自由に選べるようになりました。

その後一九八九年にインドとネパールを五ヶ月間放浪しました。それはヒマラヤの広大な空間に身を置きたい、と思ったからです。この放浪の期間が僕の芸術にとって非常に大きな体験となっています。

それから一年半くらい経って、九一年位からコンピュータを買って勉強を始めました。最初は3D的なアニメーションから入ったのですが、それは全然僕の作品にはなりませんでした。次にキャドを買ったのですが、これもだめで、四年位経ってから、数学のプログラミングのソフトに数式を入れて作品を作るようになりました。展示室でご覧いただいているものです。

まだまだ語りたいことがあるのですが、時間が来ましたので、最後にこの講演に際して作ったアニメーションをご覧下さい。（以下プロジェクターとパソコンを用いて作品を映しながら、プログラムの解説を行う。）

（「プリズムのきらめきから　西田洋一郎絵画空間」展にちなんで、七月七日にホールで行われた講演内容を、当館の責任で要約したものです。）

図書閲覧室NOW

全国の美術館展覧会情報

毎年、全国の美術館博物館施設において、多くの展覧会が開催されています。たとえば、「日本の美術館と企画展ガイド　2002―03・3／2002／淡交社」に掲載されている今年度の企画展の数は、主なもので約百種、さらに各館別のデータを含めるとそれの何倍もの数になります。

こうした展覧会の情報は、美術雑誌や新聞・テレビなどのほか、現代ではインターネットによって得ることが可能です。当館でも図書閲覧室において、展覧会の情報を提供するレファレンスサービスをおこなっているほか、ホームページの「他館情報とリンク」のなかで、各地の展覧会情報を掲載しています。このようなサービスは、手元に収集した情報に基づいて行っており、主に情報源となるのは、毎日、館に送られてくる各地の展覧会のポスターやチラシなどです。ポスターには、展覧会の代表的な作品の写真に加え、タイトルや会場、会期、観覧料など必要最低限の情報が載せられており、これまで主なものは、館内のポスター掲示板に貼り出してきました。一方チラシには、その展覧会の趣旨や主な出品作品など、概要がわかる程度の情報量があり、ポスターよりもその内容を把握することが可能です。

これまでチラシ類は、積極的に公開してきませんでしたが、重要な情報源として活用できると思われ、図書閲覧室の開架書架の一角にコーナーを設け、来館者が自由に閲覧できるようファイリングすることにしました。ファイルは、展覧会のチラシ類をまとめた「全国展覧会案内」六冊、各館の年間スケジュール表をまとめた「全国展覧会スケジュール」一冊、県内の展覧会情報をまとめた「石川県内の開催展覧会」一冊、県内の様々な文化施設の案内を集めた「石川県内施設案内」一冊、県内の観光や宿泊に関する情報をまとめた「県内観光ガイド&宿泊所」一冊です。どうぞご利用下さい。

※開室時間は午前九時三十分～午後四時三十分。
貸出し、コピーサービスは行っておりません。

企画展示室

第12回石川独立DO展

十二月十二日(土)～十七日(火)
(第8・9展示室)

石川独立の前身は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にDO（ディーオ）展として発足しました。日本的フォービズム（野獣派）の流れを汲む独立展は、自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

出品予定作家

上田英子　金子顕司　喜多村徹雄　京岡英樹
倉　拓也　桑野幾子　指江昌克　佐藤仁敬
澤　秀和　田井　淳　多見谷恭子　南城　守
西又浩二　堀　一浩　前田さなみ　三浦賢治
水野雅己　水野寿代　山田裕之

入場無料

〈連絡先〉金沢市小立野一―一三―四　山田裕之
☎〇七六―二二一―七七九二

第26回日創展&新院展金沢展

十二月二十日(金)～二十二日(日)
(第7・8・9展示室)

日創展は会長丹羽俊夫（新院展副会長）の襖絵四枚組の大作、理事長三宅厚史、事務局長今村文男の力作を始め、石川、富山、福井、岩手から幅広い年齢層の日本画約六十点を、新院展（東京展）から最高顧問桟勝正、会長石井宝山の作品を始め約四十点を選抜して展示します。

主な出品者

北出朝之　保科誠　作田保夫　柴田輝枝
南好乃　中村勝代　松尾功一郎　福井淳一
村中博文　伊藤夏子

入場無料

〈連絡先〉金沢市窪一―二二三　丹羽俊夫
☎〇七六―二四四―五九一六

――（美術館の本）――

	税込定価（円）
石川県立美術館所蔵品図録	三、五〇〇
前田育徳会展示室　開館記念名宝展	一、五〇〇
前田利為と尊經閣文庫	二、〇〇〇
工芸作品と図案　―創造への思考―	二、〇〇〇
前田利家没後400年　利家が生きた　桃山時代の美術	二、五〇〇
没後25年　写実と幻想の巨匠　宮本三郎	二、三〇〇
初公開　欧州随一の日本美術コレクション　ランゲン夫妻の眼	二、〇〇〇
―石川県立美術館所蔵―　九谷名品図録（改訂版）	二、〇〇〇
彫刻家　吉田三郎	二、〇〇〇
花の様式　ナンシー派展	二、二〇〇
花と緑の名品展　―自然との対話―	二、〇〇〇
日本芸術院会員　大樋長左衛門の世界	二、二〇〇

※ミュージアムショップで販売中!!
郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。
（☎〇七六―二三一―七五八〇）

貸出中の所蔵品

色絵木瓜紋膳組　吉田屋窯
色絵鶴文平鉢　吉田屋窯
色絵麒麟図輪花鉢　吉田屋窯
他五点、計八点

展覧会　吉田屋伝右衛門生誕250年記念展「吉田屋窯名陶展」
会　期　平成十五年一月二十六日（日）まで
会　場　石川県九谷焼美術館（加賀市）

色絵金彩海龍図遊環花瓶　春名繁春作
彩瓷芋版壺　石黒宗麿作
計二点

展覧会　開館記念展Ⅰ「現代陶芸の100年展」
会　期　平成十五年二月三日（月）まで
会　場　岐阜県現代陶芸美術館（多治見市）

企画展TOPIC

脇田和―鳥を描く

猪熊弦一郎、小磯良平、中西利雄、内田巌らと共に脇田和氏が新制作派協会（現、新制作協会。今年九月に六十六回展を開催）を創立したのは昭和十一年。十年から始まる帝展改組の混乱は、これら帝展若手のホープ達を、新しい団体設立へと向かわせました。

新制作は今もしゃれた洗練美をウリとしている団体ですが、それは創立当初からのことで、都会風のモダンなスタイルが評判を呼んでいます。

この頃の脇田氏の作風はうねるような曲線で描かれる男女の群像でしたが、戦時体制が深まると共に、子供や母子をテーマに稚拙味と親密さとが溶けあった世界へと移っていったように思われます。それらは写実とは一線を画す、画家の内なる世界といえましょう。

さて、前回は大正から昭和十一年までを述べたのですが、掲載した写真が昭和十七年の「二人」という作品だったのを不思議に思われた方もいらっしゃったのではないでしょうか。実は、脇田氏の戦前の作品は留学中のものも含め、その大半が戦火で失われてしまっているのです。ですから、私たちが脇田氏の一連の作品を思い浮かべるとき、戦後の、つまり三十七歳以降の作品を思うことになります。そこに脇田氏の作風が、激動の昭和を生きた画家であるにもかかわらず、なにか常に不変の感じをいだかせる一因があると思われます。

戦後の脇田氏は時代の寵児として各国の国際展に出品を重ねることになります。そして鳥をメインテーマとして描き出すのは、昭和二十八年からのことで、この年、脇田氏は肋膜炎を患い療養生活を余儀なくされました。そこへ見舞いに来た彫刻家がマシコという野鳥を鳥かごに入れて、持ってきたのでした。その頃の代表作が「鳥に話す」という美しい作品です。

鳥に話す　昭和28年
高崎市美術館蔵

脇田氏は鳥を描くことに関して次のように語っています。

『鳥は自分だと思っているんです。鳥に託して、色々な条件を加えた画面の中で、なにかメッセージを作りたいんです』。『自分を託すものとして鳥を選んだということは、色や形が美しいということはもちろんですが、やはり対話ができる動物だったということがありますね。それに、鳥は色々な場所へ飛んで行くでしょう、飛んでいった先が次々に変わるでしょう、それを想像したら、鳥と合わせるモチーフには無限の広がりがありますね』

変わらぬかに見える脇田氏の作品ですが、やはり二十年代末からの十年間ほどは、時代が抽象絵画全盛期ということもあって、人物や鳥の形体は時に単純化された形体となり、時に幾何学的な鋭角や記号で画面全面が埋め尽くされることもありました。時代と共にその作品は確かに動いているのです。

昭和四十年代は具象絵画の復興期と捉えることができますが、脇田氏の場合、作品は〝にこ毛〟を思わせるような柔らかな輪郭と、色面と色面とがこすれ合って、日本の古典絵画に見られるような渋みのある玄妙な調子をみせ始めるのが、四十年代半ばのことでした。以降それが今日まで発展しながら続いているといえましょう。近作の充実振りを思うと、若い時期から鋭鋒をみせた脇田氏ですが、熊谷守一や中川一政のような、むしろ、晩成型の画家であったのかと思えるのです。

（二木伸一郎　学芸専門員）

「鳥と語る　詩魂の画家　脇田和」展
一月四日(土)～二月二日(日)

十二月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
12／1（日）	CDコンサート	武満　徹（2）　「鳥は星形の庭に降りる」ほか（約40分） 指揮：岩城宏之／演奏：NHK交響楽団ほか	ホール
12／7（土）	土曜講座	漆芸の魅力　8　正倉院　（寺尾健一　学芸専門員）	講義室
12／8（日）	月例映画会	叙情の意匠　李朝みやびの世界（23分） 世紀末芸術　アール・ヌーボー（23分）	ホール
12／14（土）	土曜講座	エル・グレコ　人と芸術　（織田春樹　学芸主任）	講義室
12／15（日）	月例映画会	クロード・モネ　印象派とはⅠ　眼に呪われた画家（23分） 亜欧堂田善（28分）	ホール
12／21（土）	土曜講座	水彩画の美1　（西田孝司　学芸主査）	講義室
12／22（日）	月例映画会	クロード・モネ　印象派とはⅡ　画家は光に失明する（23分） 志野に生きる　鈴木蔵（33分）	ホール

※年末年始の全館休館日は十二月二十四日(火)～一月三日(金)です。

各地の展覧会　十二月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

ウィーン美術史美術館名品展
―ルネサンスからバロックへ―
東京藝術大学大学美術館（東京都台東区・〇三―五六八五―七七五五）　11／30～12／23まで

松田権六　作品と図案
東京国立近代美術館工芸館（東京都千代田区・〇三―三二一一―七七八一）　11／30～1／8

開館十周年記念　中西夏之展
愛知県美術館（名古屋市東区・〇五二―九七一―五五一一）　12／20～2／23まで

クッションから都市計画まで
―ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟
ドイツ近代デザインの諸相　1900-1927
京都国立近代美術館（京都市左京区・〇七五―七六一―四一一一）　12／23まで

大レンブラント展
京都国立博物館（京都市東山区・〇七五―五四一―一一五一）　1／13まで

龍門文庫　知られざる奈良の至宝
奈良国立博物館（奈良市・〇七四二―二二―七七七一）　11／26～12／23

次回の展覧会

茶道具と名物裂　（前田育徳会展示室）
新春優品選　―茶道美術を中心に―　（第2展示室）
―輸出の華―　明治の工芸　（第5展示室）
一月四日(土)～二月二日(日)

鷺　娘

北野恒富

明治13年(1880)～昭和22年(1947)

昭和初期

縦118.0　横42.0(cm)

「鷺娘」は、歌舞伎舞踏の一つです。江戸時代の宝暦十二年（一七六二）、江戸・市村座で二世瀬川菊之丞が初めて演じたとされています。その後、一時廃れたものの、明治になって再び演じられるようになりました。

内容は、白鷺の化身としてあらわれた、娘の恋の妄執を表現したものです。はじめは、雪がしんしんと降る夜、白鷺を象徴する白無垢姿の娘が、恋に悩む苦しい胸のうちを踊りに託して舞います。そのあと、友禅衣装の華やかな姿で恋心を表現しますが、最後は白鷺の姿となって、恋の迷いから地獄の呵責に苦しむという場面へと展開していきます。

この作品では、縦長の画面の右に寄って立つ鷺娘が、雪のちらつく中、暗い背景からぼんやりと浮かび上がるように描かれ、幻想的な雰囲気をただよわせています。色彩表現は、いたって簡素で、かいま見える唇と袖口に、わずかに紅色を配し、艶麗な中にも気品のある作品に仕上げています。放心したような、うつろな眼差しの表情には、内に秘めた激しい心の葛藤の傷跡が、暗示されているようにも感じられます。

金沢に生まれた恒富は、はじめ木版画の下絵と南画を学び、一時期金沢の新聞社に勤めました。明治三十年に大阪に出ると、木版彫師・伊勢庄太郎の下で版下画を描き、翌年、同じ金沢出身で月岡芳年門下の稲野年恒に師事、新聞挿絵で人気を得ます。明治四十三年には、文展に入選し、翌年三等賞を受け、一躍注目されはじめます。大正三年、再興第一回院展に参加してからは、主に院展を作品発表の舞台とし、大阪画壇の中心的存在として活躍しました。

ミュージアムショップ通信

「利家とまつ」展終了。熱気が去った後の反動のような冷え込みが、ひときわ身に沁みいる今日この頃です。でも、会期中ずっとロビーに流れていた「利まつ」のテーマ音楽が、いまだに頭の中で鳴り響いているような…。まぁ、大河ドラマに明け暮れた一年でしたね、美術館は。

さてこのコーナーも通常モードに戻りましょう。今月は呉須赤絵花鳥文湯飲（九谷焼）です。山川コレクション（だより第二一四号6頁で紹介）の呉須赤絵花鳥文香炉がモデルです。簡略だけど力強い筆使いですね、勢いがありますよ。赤と緑の彩りもあざやか。壷として作られたものを香炉に見立てて、今に伝えられたものだそうです。中国の明時代末頃の制作といいますから、ざっと四百年の古さ。もともと中国福建や広東方面で、輸出品として大量生産されたものです。商品の方は複製ではないので、図柄もそっくりそのままというわけにはいきませんが、雰囲気をよく伝えています。

呉須赤絵花鳥文香炉
明　17世紀

呉須赤絵花鳥文湯飲（九谷焼）
（定価4000円）

休館日

十二月二十四日(火)～一月三日(金)

石川県立美術館だより
第二三〇号　平成十四年十二月一日発行
〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二番一号
TEL　〇七六(二三一)七五八〇
FAX　〇七六(二二四)九五五〇